

第2章 銃後

勤勞動員②

戦争が中心の中学校生活

氏家 清さんのお話から

○植民地 国策によって他国を領有し移住者によって経済的に開発された土地。

○恐慌 好景気から不景気に移る際に起こる、経済界の混乱状態。

○尋常高等小学校から国民学校初等科・高等科へ昭和十六年の国民学校令というきまりにより、それまでの尋常高等小学校を、国民学校初等科(六年制)、高等科(二年制)と改めて成立した教育機関。

○援農 日本全国で十二歳から十五歳の中学生が働き手の男性が戦場に行つて手薄になった農村に働きに行ったこと。

私が生まれた昭和六年(一九三一年)、日本は満州で戦争を起こしました。満州を武力で支配し植民地にするためです。満州から安く仕入れた材料で、台湾や樺太の南部、朝鮮半島など他の植民地へ日本のものをどんどん売り、日本は何とか恐慌を脱出しました。

昭和十六年には太平洋戦争が始まり、その翌年には日本の教育制度が国民を戦争に駆り立てる教育へと変わりました。それまでの尋常高等小学校が国民学校初等科、高等科に変わり、学校では勉強するよりも、戦争に積極的に協力するような教育を国が中心になってやっていくという考え方に変わりました。私が小学校五年生の時です。

その当時は小学校六年生が終わると、中学校へ行く道と、高等科二年に行き、高等科二年が終わったら今でいう実業学校、工業、商業、農業学校に進む道がありました。私は中学校に進みました。

中学校に入って勉強ができるものと思つていましたが、全然できませんでした。なぜかという、援農と称して農家に行つて手伝いをしなさい、農家の成人した男性は戦争に取られてしまったからその穴を埋めに行きなさい、ということになったからです。冬になって農家の仕事が終わると、今度は道路工事の仕事をやることになりました。私の中学校は苦小牧にありましたが、苦小牧から岩見沢の方へいくと、次が沼ノ端というところでしたが、そこまでは道路がなく鉄道の線路だけしかありませんでした。これでは、物がうまく運べないので、冬の間はそこで道路づくりをしました。

勉強は、全然できませんでした。たまたま、私はあまり勉強が好きではなかったから良かったけれども、勉強をやりたいという人は非常につらかったと思います。

また、当時は毎日のように上級生から殴なぐられました。なぜかという、戦争を中心とした教育のため、上の者の命令は絶対だったからです。

「死ぬために戦争に行け。」と言われたら、あなたは戦争に行くことができずか。「家族や国のためにあなたの命が欲しい。」と言われたらみなさんはどうしますか。私の時代は、家族や国のために死ぬことが男の本懐ほんかくだと言われていました。男の最も美しい生き方は、家族を守り、家庭を守り、国を守る、そのために命をささげることだったのです。今とは考え方が全然違うでしょうが、そのような時代だったのです。

当時の中学校は男子だけで女子は別の学校に進学しました。学校では戦争に関することだけになり、戦争に行つて戦える人間をつくろうということになりました。そこで、男子は朝から晩まで柔道と剣道をしていました。そのころは野良犬のらいぬがたくさんいて、一番大きい犬が中心になって五、六頭の集団をつくつて人に脅おどしをかけることが何回もありました。その時、道端みちばたに落ちていた竹刀しなひの折れたものを差しておいて、犬がみつこうとするときに、さっと抜いてターンとたたたく



イメージ図

剣道の練習

○軍部 軍人を中心とした勢力。

のです。それで剣道の練習をするわけです。あとは、自転車のチューブを丸のまま縛りつけて、両手で持って右へ、左へ投げる練習です。それから、床に投げられたときに受身の体勢をとる練習もしました。そうやって、いろいろなところで訓練をしました。

そして、中学二年生になった年の八月十五日に終戦を迎えました。

平和とは一体何でしょうか。平和とは互いに健やかに育っていく社会、平穏な社会です。平和の反対の言葉が戦争です。戦争というのは国と国が争うことです。本当に平和で安全に暮らせる社会をつくっていくことが大事なことなのです。

日本はいくつかの戦争をしてきた中で、軍部がどんな力をつけていって、お金はすべて軍隊にいつてしまふから、犠牲になったのは国民の生活でした。どうやって国民生活を良くしていこうかという考え方は、昭和二十年八月十五日の後に生まれたのです。

戦争中は食べ物がないと、国民は我慢しなさい、食べ物がないと、国民は我慢しなさい、食べ物には命懸けで戦っている兵隊に送ろう、国に残っているものは草でも何でもいいからどこかで食べなさい、という時代だったからです。私には兄弟が八人いて、両親を合わせると家族が十人いました。だから、食べ物ほとんどありませんでした。けれども、自分だけではなく誰もがそうだったので、み

○特攻隊 特別攻撃隊。陸海軍の航空機・小艇による敵空母・艦船への体



イメージ図

特攻隊

当たり戦法を行う攻撃部隊。昭和十九年（一九四四年）、戦闘機の零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせた攻撃が海軍の組織的戦法として採用され、「神風特別攻撃隊」と名付けられた。その後、陸軍も特攻隊をくりだし、以降は特攻隊が航空攻撃の中心となった。また、航空機のほか小艇による特攻隊や人間魚雷「回天」などによる特攻攻撃も行われた。

○軍艦 海軍の艦艇で、戦闘力をもつもの。戦艦・巡洋艦・航空母艦・潜水母艦などをいう。

○機関銃 引き金を引いている間、自動的・連続的に弾丸が発射される銃。

○隼 帝陸軍を代表する戦闘機として、太平洋戦争における主力機として使用された。

んな我慢できたのです。

みなさんは特攻隊という言葉聞いたことがありますか。飛行機に乗って相手の軍艦めがけて突っ込んでいくのです。アメリカの飛行機は、機関銃で撃たれてもパイロットが死なないようにガードを固めるものがありました。ところが、日本の隼という飛行機は速く行って相手をやっつけるために造られたものですから、安全性は全然考えられていなかったのです。そのため、多くのパイロットが戦う前にほとんど機関銃などでやられ、飛行機も落ちてしまったのが実態でした。しかし、そのような飛行機に乗って、国のために、家族のためにとって頑張ったのがみなさんの年代のときの私たちなのです。そのような時代を乗り切って今の平和な日本ができたのだということをぜひ忘れずにいてください。それ以降、六十数年、日本は戦争と全く関係ない平和で安全な社会を築いてきたのです。これは世界では他にないのです。日本は世界から見たらちっぽけな国かもしれませんが、この小さな国がなぜこんなに平和で豊かな社会を築けたのでしょうか。それは、あのような多くの犠牲があったからです。そのことにぜひ感謝をしながら、かつてのような世の中をつくらないようにしていつてもらいたいというのが私の願いです。

平和は社会の繁栄をもたらしめます。みなさんが命を落とすことやけがもない社会をつくっていくことが大切です。一番大事なことは平和だということを通して、考えて行動してください。そして、今後もいろいろな本や新聞を読んで平和について学んでいただきたいと思います。

DATA

平成21年手稲区平和事業

聴き取り

- ・平成21年10月1日
- ・稲積小学校



氏家 清(うじいえ・きよし)さん

- ・昭和6年(1931年)生まれ
- ・札幌市手稲区在住